

弘法大師空海の入唐の謎に迫る

香川 威徳院住職 坂田 知應

弘法大師空海が二十四歳の十二月一日に『三教指帰』を著して以降、三十一歳で入唐するまでの六年間は空白の時期と言われてきました。その空白期間を弘法大師空海自身の言葉によって少しでも明らかにしたいと思えます。

①なぜ命がけて入唐を決意されたのか？

弘法大師空海が唐から請来した曼荼羅などの傷みが著しくなつたので、修復していましたがようやく完成し、その開眼法要(弘仁十二年「八二」九月七日)の願文である「四恩の奉為に二部の大曼荼羅を造る願文」(『性霊集』)に、「精誠盛有つて此の秘門を得たり。文に臨んで心昏し。赤

縣を尋ねんことを願う。」

(私の心が通じたのであろうか、真言の深妙な教えに接することができた。しかし、経文を誦しても、一向に理解できない。そこで教えを求めて中国を訪れようと心に堅く誓いました。)の文章から入唐する目的を具体的に知ることができます。

弘法大師空海は、南都で研鑽されていた時に秘門、恐らく『大日経』を読んで無理解できなかったのです。この『大日経』は、無行がインドで入手し中国へ伝えたものに善無畏がインドから持参した『大日経供養次第法』を合わせて七二四年に漢訳したものです。その「大日経供養次第法」には梵語を音訳した真言

が説かれていたため、当時の弘法大師空海にはいくら誦しても理解できなかったのです。それを南都の学僧たちに尋ねても誰も教えてくれなかった

ので、そこで入唐する決意をしたのです。入唐するには遣唐使船で行くしかなかったのですが、第十七次遣唐使が宝龜十年(七七九)に派遣されてから二十年余りも行われていませんでした。

②遣唐使船出航の謎

弘法大師空海は、「私、空海は去る延暦二十三年(八〇四)夏六月に入唐の大使藤原朝臣に随つて、同じ第一船に乗船し、唐国に向け出発いたしました。」(『請求目録』)と述べていますが、当時まったく無名な弘法大師空海がなぜ大使と共に第一船に乗ることが出来たのかは不思議なことであり、大きな謎です。桓武天皇が信頼を置いた最澄が第二船に乗っていたことに比べて破格な扱いなのです。本

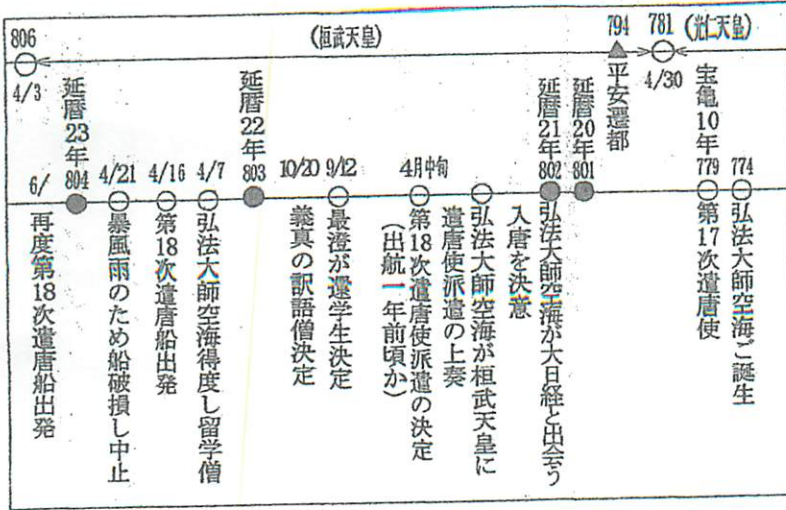
来、還学生・留學生は事務官が乗船する第二船に乗るべきなのです。

また、弘法大師空海は弘仁十二年(八二二)の法要の願文の中で「人の願ひ天願う、大唐に入ることを得たり。」(「四恩の奉為に二部の大曼荼羅を造る願文」『性霊集』)、すなわち、人びとの願ひを桓武天皇が聞き入れて下さり、大唐に行くことが出来たと當時を振り返つて述べておられます。さらに、嵯峨天皇への上表文に「空海幸いにも先帝すなわち桓武天皇の二恩沢を蒙り、遠く大唐の国に留學することを得云々」(「国家の奉為に修法せんとするにあたり、ご許可を請う上表文」『性霊集』)と述べていることなどから推察すると、弘法大師空海は桓武天皇に遣唐使派遣の重要性と必要性を上奏したものと考えられます。

遣唐使の目的は、唐の先進的な技術や政治制度、文化・仏教經典などを収集すること

です。しかし、弘法大師空海が六歳の時に第十七次遣唐使が派遣されて以来桓武天皇の時代には一度も派遣されていませんでしたので、その必要性を弘法大師空海は桓武天皇に嘆願して、遣唐使の派遣が決定したものと思われま

す。弘法大師空海が乗った第一船は三十四日間漂流し福州の赤岸鎮に漂着しますが、海賊に間違われて上陸が許されませんでした。そこで、大使に代わつて遣唐使船であること述べた代筆の手紙を書きま



書いた手紙(「福州の觀察使に与えて入京する啓」『性靈集』)、さらに、帰国途中に立ち寄った越州で持ち帰る經典などの収集を依頼した手紙(「越州の節度使に与えて内下の経書を求む啓」『性靈集』)で觀察使や節度使の心を動か

したように、弘法大師空海の文章は力強い筆跡と格調高く素晴らしい美文で、知識人や文化人の心を動かす効力がありました。弘法大師空海の文章が人びとの心を動かすほど素晴らしいのは、「私は幼いころから母方の叔父である阿刀大足について漢文の美しい文章を学び、云々」(『文鏡秘府論』)と述べていることから納得できます。

第十八次遣唐使の派遣が決定した時期は、実際に遣唐使船が出航した延暦二十二年(八〇三)四月十六日の一年前、延暦二十一年(八〇二)の四月中旬頃と思われると思います。それを受けて和氣弘世の上表文によ

つて天台の円基と妙澄が留学僧、九月十二日に最澄が還学生、十月二十日には義真が訳語僧に任命されています。これらのことから弘法大師空海が桓武天皇に上奏した時期は、延暦二十一年(八〇二)初春頃のことではなかったと思われまふ。だから、弘法大師空海が南都で秘門(大日経)に出会ったのはその時期をあまり遡らない頃と考えられます。

③得度と入唐の年

近年、注目を集めている太政官符の写し(案)「大和文華館蔵」があります。それは平安時代末期の写しで、延暦二十四年九月十一日の紀年銘がある太政官符です。それには「留学僧空海は、去る延暦二十二年四月七日出家し入唐」の記述があり、出家得度と留学僧として入唐したことを語っています。

格しなければならぬことは博学ですべてに通じていた弘法大師空海が失念していたとは考えられません。それが遣唐船出発、四月十六日の間際になったことは遣唐使の派遣が決定する時まで、何らかの問題で国家試験を受けることが出来なかったからと考えられます。延暦二十二年(八〇三)四月七日に得度して初めて留学僧になった訳です。で、当初遣唐使船で入唐が認められた時には私度僧でした。だから、還学生や留学生と共に第二船には乗船できなかったものと思われまふ。弘法大師空海が「入唐の大使藤原朝臣に随つて云々」(『請来目錄』)と述べていることから、遣唐大使の随行あるいは通訳のような立場であったのかも、しれません。さもなければ、福州で大使が一留学僧に手紙の代筆を頼むことは考えられないことと思われまふ。ただ、遣唐使船が出航の十日前になつて得度し留学僧として認め

られたので、弘法大師空海は最終的には留学僧として入唐されたことになりまふ。それは、「空海は去る延暦二十三年に留学の命令を受けて、海路万里を渡り唐土を訪れまし」(『請来目錄』)の文章から知り得まふ。

弘法大師空海が難波津を唐に向かつて出航したのは、延暦二十二年(八〇三)四月十六日、三十歳の時でした。しかし、二十一日に暴風雨に会つて船が破損したため中止となり、翌年の延暦二十三年(八〇四)六月に再度出航することになるのです。入唐を決意された弘法大師空海が再度出航した延暦二十三年(八〇四)に初めて乗船することは絶対にあり得ないことと思われまふ。以上、「弘法大師空海の入唐の謎に迫る」について持説を述べましたが、六年間の空白の期間の内、弘法大師空海の二十九歳と三十歳の二年間の行動が明らかになつたと思われまふが如何でしょうか。



かしょうざんまい
 「火生三昧」(自ら激しい炎を発して深い瞑想に入る不動明王の境地)

令和元年11月23日執行の総本山善通寺での柴燈大護摩火生三昧。四国新聞「読者の写真コンクール」(令和2年2月27日付)で第2席に選ばれる。撮影者は善通寺市在住の森江 正氏。

虚空尽き、衆生尽きなば、涅槃尽き、我が願いも尽きん。
 「一切衆生の涅槃(永遠の幸福)が達成されるまで、私は救い続けます」
 —天長九年(八三二)お大師さま五十九歳、高野山の万灯万花会の願文—



「炎に浮かぶ煙大師」

平成30年11月23日執行の総本山善通寺での柴燈大護摩において、合掌して両目を見開き本尊不動明王に対峙するお大師さまが現われる。撮影者は香川県多度津町在住の小野 純一氏。